



遠近新聞

第十號

定價一匁



西垣文庫 特
文庫 10
7265
8



文庫10
7265
8

遠近新聞第十号

慶應四年五月朔日

人心一致の説

唐通居士

我此程一友人の宅を訪ひしに遇く例の議論家打寄
りて世事を論せし最中と見へ予が入り来りを見て
寒暖等の常套数句を述べや否や突然とて問て曰
く天下の人心を一致せしむる道如何予曰天下の事
を姑く差置き夫より先づ諸君又問ふべき事あり
譬へん爰又一つの大なる座敷ありて其内より大名
も有り町人もあり士も有り農民もあり坊主神主の

遠近新聞

四十七

西郷文庫

5719

類も有り職人日雇稼の類も有り奥様も水姫松も女
郎も藝者も有り一口又いつくバ貴賤老若男女打混ト
百余人計も偶然又集まりたる者有り尤諸君善く其
人心を一致せしめたるも如何満座の人相顧
て對ふ者あり予又曰諸君之を一致せしむるの趣
向なくんぞ恐くハ亦天下の人心を一致せしむるの
策なくらん僕ハ竊又一説有り諸君善く僕ガ言ふ所
を聴きたまはんや満座の人曰願くハ足下の説を聴
らん其時予容を改め之又語て曰く僕をしつ右の座
敷又長ししむバ先つ試よ一人つ其欲する所を

聴らん左きれば大名ハ国を富まさんしつ堺を拓ら
んしついせん町人を金を儲けんしついせん農民ハ
年の豊あるを願はん士ハ文武しつ功名しつ立身出
世しついせん貴賤老若男女夫夫の志願を言ひ盡
て諺よも言ふ通り人心の同しつうらざる正面の如く
しつしつ一致しつべき気色なからん然しつとも僕ハ夫
とよ一向頓着せし段くは問ひ糾しつ早朝より始り晝
も過ぎ最早八つ時頃しつもなつたらんとお同しつ頃
又至り衆人又對していせん諸君の意千差万別しつ
て俄又承り尽くしつかきし斯くてハ今少し手間も取

ふくくと存ざれば時刻に付粗飯を呈さるありとて
兼て用意しつる膳を差出さば衆人必之を喫せん
此時自分も亦退て之を喫し稍姑くして衆人の悉
く喫し終りつる頃を窺ひ再び出て之を論じてい
ん我諸君の意を見らば區々として同一からん然
とも食の一事に於ては何れも異論なきに似たり如
何とやと問を衆人の答はうんあらん予おりへら
く衆人必以異論なりといはん果して然らば食の一
事の既一致せるあり次又衆人に對し我諸君の
衣服を見るに結紵り木綿紵り麻あり毛織紵り仕立

方色合は至ても亦皆同一からん然とも此内一人
裸体なる人なり然らば衣服の事に於ても亦各異論
なきに似たり如何とやと問を衆人亦必以異論な
りといはん次又衆人に對し諸君平生如何なる
所を居たりや家を居たりや露處にたりや
と問を衆人亦必以家を住まといはん果して然ら
ば衣と住も亦一致せるなり夫は衣食住の三を人命
の基源として万業の大本なり今此大本既一致せ
し上へ其他の諸事一致せざる者なきらん縱令其間
は一二の一致せざる者ありとも是猶食と甘辛の別

り衣は結木綿の別らり如くちとバ全局の妨は害
ぢし是我人心を一致せしむるの法あり諸君はハハ
うと思ひたりしやと問へど坐客皆いつのまにう眠
を催せし松子とて答ふる者ありしハ我亦吾説の當
るや否やを知らん

辰年四月十六日

○ 林昌之助高官位をも差上勤 王の免を願ひ由

○ 此節加州人数會津へ一大隊計操出ひ由

○ 會津兵白川棚倉を攻落し庄内兵天童山形新庄を攻
落し仙臺出兵引揚ひ由白河へ片倉出張し由是
又引揚け相成近藩の兵も悉く領国へ引取官軍計残
ひ処會兵攻懸り忽ち攻落し由

○ 當二日徳川脱走人の由上総木更津表より并富津陣
屋より越談判の次第有之し又付詰合の家来二十
人程人数差出ひ事と相成ひる不取敢昨四日申上
は後より座は然處脱走人より陣屋并兵糧等借受度

音強談有之不得止事情立至り以又付詰合の家老
小河原多宮と申者切腹仕以又付猶右等の次才を以
て脱走一及談判差出以人数の儀ハ相戻一以音中越
以右中越以迄以委細事情相分り不中得共不
容易次第至り以又付此段不取敢申上以以上

閏四月六日

右前橋より文通の写

茅屋瀧兵衛山川大内藏軍奉行田中藏人脱走兵大鳥
圭介部某都て千五百人程右の勢藤原高德大葉へ

出張の處官兵土州彦根の勢押寄日光山領小佐越村
柄倉村辺より今市の間當十九日戦争相始り以処官
軍敗走の由翌廿日今市の辺より又戦争以座以処
是亦脱走兵會津勢勝利以座以右の趣宮様御家来
稻田勘兵衛去る廿一日日光出立同廿三日東台へ着
尾臺藏太并覺王院へ注進の趣内へ承る廿二三日頃
定て日光戦争の松より可相成哉の音中関以事

○琵琶り系 三百卷 松本藩天童木澤先生編輯
此書の源平藤三統よふも保元以降元和に至りて治
乱の實蹟賢哲の事業を詳よ挙げ一自家の評論を
加へ大よ世教よ裨けりり書りて和文を以て筆記
しる申へ看讀よ便あり其他詩書易春秋等註解漢
說尤多し然まども皆刊行よ至らぬ故よ看官希あり
此よ載せて世よ公よ為んを庶幾よ云爾

門人 增澤省軒敬誌

○ 閏四月廿九日

大總督宮に仰渡の覚

□□服罪の上ハ徳川家名相續の儀ハ祖宗已來の功
業に 思召格別の

慮慮を以て田安亀之助ハ 仰出の事

但城地祿高の儀ハ追て 仰出の事

